

低音域で謡う「次第」

高 桑 いづみ

「次第」は登場歌のイメージが強いが、「クリ・サシ・クセ」の前、あるいはなにか行動をおこす際の冒頭に序歌としても謡われる。七五調三句のうち、第二句は第一句と同じ歌詞なので内容的には二句のみの短い謡だが、フシはほぼ定型化しており、第一句は上音で歌い出して中音に下行、第二句は上音↓中音↓上音↓中音と音高が推移し、第三句は中音で謡い出して下音で謡い収める。通常の声量で謡ったあと、地謡が小声かつ拍子不合で詞章をくり返す(地取という)のも、「次第」の特徴である。

ところが、この定型から外れる「次第」が〈竹雪〉(土車)〈昭君〉にある。この三曲に共通するのはまず低音域で謡うこと、地取のほかに通常の声量かつ拍子合で詞章をくり返し、都合三度「次第」を謡う点である。旧日本古典文学大系(岩波書店刊)では〈昭君〉の「次第」について、「次第(三遍返シ)があったりするの古い形のままだろう」と備考欄に記している。三遍返シとは、協能で登場したワキ・ワキツレが最初に謡う「次第」の演出で、地取を

拍子にあわせて謡ったあと、再度ワキ・ワキツレが「次第」をくり返す。備考を執筆したのは横道萬里雄氏と思われるが、氏は、協能に限らず「次第」は三遍返シで謡うものだった、と解釈されたようだ。この横道説について、少し考えてみたい。

上記の三曲は上演頻度は高くないが、遅くとも禅竹時代には存在し、桃山時代以降の謡本もそこそこ残されている。まず、現行のフシを確認しておく。

〈竹雪〉は継子いじめを扱った作品である。継母により凍死させられた我が子を探しに実母と姉が訪れる場面で、「降るに思ひの積るゆき、く、消えし我が子を尋ねんと謡う。寛文の書上では宝生流のみの所演曲だが、文政八年の書上で喜多流も加えた。現在でも宝生流と喜多流が所演曲としているが、喜多流は「二声」で登場し、すぐに「セイ」謡を謡うので「次第」はない。宝生流では、「アシライ出」で登場した後「サシ」をはさんで「次第」になる。冒頭の「降るに」は分離ノトリで「ふるにー」と音を引きながら最低音である呂

音で謡い出し、その後も中音と下音で終始する。母と姉が低音で謡ったあと、地謡が通常の声量で今度は上音から(といっても実際にはシテ謡とさほど変わらぬ音高で謡い出すことが多いが)謡い出し、そのあと地取を謡う。室町末期から江戸中期の謡本を繰ってみたが、確認した十冊の謡本すべてで詞章は一度のみ、そのうちの八冊が、冒頭に「次第下」「下次第」「下」と表記をし、低音域から謡い出すと示している。冒頭を分離ノトリで謡い出す指示はない(筆者注。分離ノトリとは、上の句を二分し、新たに加えた四拍分のトリの間で上の句前半を謡い、残りとの句は本来の八拍子の中で謡う技法。フシを長く引きながら上の句を謡うことができる)。

〈土車〉では、遁世した主君の子を乗せた土車を引きながら傳の小次郎が登場し、道行の序歌として子方と同吟する「次第」が「住まど世に経る土車、く、廻るや天の浮雲」である。文政八年の書上で所演曲としているのは喜多流のみで、観世流は明治以降加えた。宝生・金春・金剛流は現行曲ではない。喜多流は中音で謡い出し、ほとんど低音域で謡ったあと地取をはさんで三度目はシテと子方が上音から謡い出す。三度目の冒頭句だけ分離ノトリで、「すまーでー」と文字を引きながら謡い出す点が特異である。観世流では下音から謡い出すが、二句目でところどころ上音にあがる。そのあと、地謡が通常の声量で定型通りに上音から詞章をくり返すが、分離ノトリにはせず、地取もない。室町末期から江戸中期の謡本では、十四冊中六冊が詞章を二度くり

返し、最初は「下次第」「次第下」「下」、二度目に「上次第」「上」「次第上」と謡い出す音位を示していた。地取を含めて三回詞章を記した謡本、ゴマの記載のない無章句本なのに詞のみ三度くり返し記した謡本もある。慶長三年の奥書を持つ松井家蔵五番綴謡本は三度目の冒頭に「ヤヲハ」とあって、現行喜多流と同じく三度目を分離ノトリで始めているが、他の下掛り系謡本にも「で」に増シ節の「マワシ」があるので、同じように分離ノトリで謡った可能性は考えられる。

〈昭君〉では、昭君の老父母が、娘の形見の柳の元を掃く際に「落葉の積もる木陰にや、嵐も塵となりぬらん」と謡う(最初に謡う際、どの流儀も初句をくり返さない)。寛文の書上では金春流のみが所演曲とし、文政八年の書上では観世以外が所演曲としている。観世流は明治以降加えた。現在では五流で現行曲としているが、各流でフシが異なる。金春・喜多流ではシテ・ツレが上音で謡い出したあと地取が入り、再びシテ・ツレが低音域でくり返す。観世流ではシテ・ツレが上音で謡い出し、そのあと地謡が低音で謡い返す。地取はない。宝生・金剛流では下音(観世流の中音)でシテ・ツレが謡い出して低音域で終始したあと地取があり、そのあと宝生流は地謡、金剛流はシテひとり低音域でくり返す。室町末期から江戸中期の謡本では、「上次第」で謡い出し、二度目に「下同」「下地」など低音域で謡い出す指示のあるものが十一冊中五冊、低音域で謡い出すものが二冊、残りは謡い出しの音位を記していなかった。横道氏が岩波

旧大系で底本とした天理図書館蔵室町末期筆観世流謡本では二回詞章を記し、最初は「次第」、一度目は「二人下」と付記して二度目を低音で謡う指示がある。いずれも最初は初句をくり返さず、二度目に初句をくり返す演出で、これは現行の謡本に踏襲されている。通常は地取のときに初句をくり返さないのだが、逆にすることにどのような意図があったのだろうか。

江戸中期以前の謡本を見る限り、「土車」と〈昭君〉は、フシが変わるのでその都度詞章を記したようだ。とすると、一度しか詞章のない〈竹雪〉は上音で謡わなかったのだろう。

〈竹雪〉や〈土車〉のように冒頭句を分離ノトリで始める「次第」は多くはないが、それほど珍しくもない。〈天鼓〉〈百万〉〈楊貴妃〉など、シテの思い入れが強い作品では分離ノトリで謡い出す。しかし〈天鼓〉以下の三曲は上音から謡い出すので、通常の地取のみで三度はくり返さない。

問題は、どうやら音域らしい。

横道氏の言われるように、「次第」は本来三遍返しをする小段だったのだろうか。〈昭君〉は古作ゆえに古態を残した、と横道氏は考えられたようだ。たしかに〈昭君〉は禅竹の祖父金春権守の作だが、〈土車〉は世阿弥作、〈竹雪〉は禅竹の「歌舞髓脳記」の草稿本に名がある曲で必ずしも古作とは言えない。古作だからではなく、特異なフシ付ケ故に三遍返しになったのではないだろうか。雪の降り積もる中、亡くなったと聞かされた我が子を探す〈竹雪〉、二度と会えないだろう娘を思って落葉

を掃く〈昭君〉。絶望的な内容の「次第」はほかにもあるだろうが、この三曲の「次第」は低音域で謡うようフシ付ケされた。しかし、「次第」を低音域で謡うと地取を謡っているようである。元のフシ付ケは残しながら、定型通り上音域でも謡おうと作品ごとに工夫した結果、三遍返し風の演出になった、という経緯を考えたい。江戸時代中期まで低音域のみで謡っていたらしい〈竹雪〉も、寛政版では三度目を上音域で謡うよう変更している。

おもしろいのは、この謡い方が小書にも援用された点である。たとえば〈三輪〉の前シテ登場の「次第」。定型通りのフシ付ケで、通常は地取をするだけだが、神遊、白式などの小書がつくと三遍返しになり、シテが低音域で静かに謡ったあと地取、そのあと通常の音量、通常のフシでシテが三度目を謡って収める。習いなので重く静かに謡い出すことにしたのだろうが、やはり「次第」は上音域で謡わないと落ち着かない、ということではなからうか。

世阿弥自筆能本に遡ると、「次第」と記すだけでゴマや上、ハルなど音高を指示する直シはほとんどないが、例外と言えるのが〈多度津左衛門〉である。乳母と娘が高野山をめざすところで狂乱して謡う「ヨシナノユカヌカウヤサンノヲトコワナニカクルシキ」で、初句の「ヌ」に「ハル」と記して上行の意思を示している。謡い出しは「シ大」とあるのだが、途中に「ハル」とあるからにはそれ以前は低音域で謡った可能性も考えられよう。〈土車〉同様、「次第」を低音域で謡ったのかもしれない。

(東京文化財研究所名譽研究員)